

事業報告書

令和5年度



公益財団法人 紫雲会

横浜市緑区生活支援センター

令和5年度 緑区生活支援センター事業報告書

新型コロナウイルス感染症も多少落ち着き、少しずつ平常を取り戻しつつある状況での運営となりました。令和2年度より実施した「18区的生活支援センターにおける機能標準化」について、今年度は1年かけてこの標準化の検証を行い、更に次年度以降に向けての新たな課題を抽出することができました。現状での検討課題に向き合い、より良い支援センターの運営に繋げることで、更に相談支援体制の強化を目指し、地域における精神保健福祉活動の拠点としての機能と役割を担っていくことができるよう努力していきたくと考えます。

地域において「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築を進める中、各区において生活支援センターがその中心的な役割を担っていく必要があると感じています。そのために緑区自立支援協議会「精神部会」の場を活用し、地域の多くの事業所の協力を得ながら、多職種連携を意識した「にも包括」の構築に向けての取り組みを継続して企画しました。今後も地域のニーズを元に、地域の事業所と協働し、様々な角度からの取り組み事項の検討を進めていきます。

また今年度は、緑区高齢・障害支援課との連携強化を目的として、精神障害者福祉手帳の新規取得者向けにサービス等の説明を行う「案内人事業」を請け負いました。

引き続き緑区において、区福祉保健センター、基幹相談支援センター、地域ケアプラザなど各関係機関との協働体制を更に強化し、地域移行の啓発推進、医療との連携強化、困難ケースの受け入れやアウトリーチ支援の体制作り、更には地域での人材育成などを実践しながら、緑区の相談支援体制を拡充し誰もが安心して暮らすことができる地域づくりに繋がる活動を継続して発信していきたくと考えます。

【事業実施内容】

1. 指定特定・指定一般相談支援事業

計画相談支援については、単にサービス利用を目的とした関わりではなく、地域において本人の希望する生活を実現するための包括的な支援を継続していくことを目的とし、本人を取り巻く関係機関との連絡調整や家族調整など総合的に支援します。状況に応じた対応は不可欠でありモニタリングは重要と考え、コロナ禍においても対策を講じながら実施をしました。また地域における計画相談事業から、関わりに苦心しているケース等の相談を受けることも多くなりました。家族ぐるみの支援が必要なケースや対応に苦慮するケース、病状が安定せず緊急対応を余儀なくされるケース、また触法ケースなど、いわゆる困難ケースに対する支援については生活支援センターが特に対象とするケースと考えており、区の障害支援担当と連携しながら意識的に支援を実施しています。

相談員の支援の質を担保するためにも、緑区自立支援協議会の相談支援部会、その他横浜市や各団体主催の研修等の参加を推奨してきました。また緑区自立支援協議会においては主任相談支援専門員が中心となり「相談支援専門員のための部会」を企画運営し、区内の相談支援専門員相互の繋がりや資質向上、事業所のバックアップ体制の構築を目的として、「支援者支援の仕組み作り」を目指しました。さらに、横浜市の相談支援従事者育成に関し、研修企画検討委員会への継続した参画や、初任者研修の統括、現任研修等のインストラクターとして職員を派遣しています。

また、対象者の支援方針、支援計画の立て方や方向性についても職員間で共有し意見交換することや、職場内において先輩職員から経験の浅い職員に対してのスーパーバイズを積極的に設ける等、支援する側が孤立する事の無いよう配慮しました。

【5年度実績】

計画相談支援 52件、相談中のケース 2件
地域移行支援 3件 自立生活援助 3件

2. 地域活動支援センター事業

(1) 相談支援

新型コロナウイルス感染症対策が緩和され、日常が戻りつつあるからこそ、体調を崩す方や生活する上での困りごとを改めて感じる方が増えている印象です。

コロナ禍以前に定期的な訪問を続け、いわゆるひきこもり状態から医療機関へとつなげた方も、コロナ禍でまた外部との関わりを絶たれてしまい、時折家族との情報共有を続けることでの関わりを続けていました。その後、感染症対策の緩和やご家族の体調不調をきっかけに、単身生活へ移行していく方針となった際、これまでの関わりを活かし、生活を始める前から相談や手続きの確認、同行を行うことができました。関わりが中断したとしても、積み重ねてきた信頼関係は残っていく事例として、ひとりひとりに向き合いながら支援していくことの大切さを職員間で共有することもできました。

コロナ禍の影響からセンター来所が難しく、支援が滞ってしまうなどの状況に不安を感じさせることの無いよう、昨年同様必要な訪問の継続や電話で体調を確認することなど、意識的に支援関係の維持に努めました。利用者自身の持つ力を引き上げ、その力で自立した生活を目指すことも感染症が広がる状況下では必要なことであり、今後もエンパワメントの視点を持って関わっていきたいと考えます。

また、嘱託医相談、心理士相談については、福祉職である職員とは違った視点での相談の場となっています。必要な状況における職員との情報共有や、医療の立場からのアドバイスを頂けたりすることも多く、必要不可欠な相談の場面となっています。

(2) 訪問・同行

今年度は新型コロナウイルス感染症対策が緩和されたとはいえ、必要不可欠な訪問や同行について精査した上で実施をしました。職員も利用者も同様に感染症対策の徹底や必要性を常に意識することや、訪問前に電話にて本人の体調確認をするなど、できる限りの配慮の中で支援を行いました。また感染症への不安など、訪問による支援への心配をされる方には、電話による定期的な連絡などで継続的な支援を心掛けました。

そして定期的な訪問を続けるからこそ、体調の変化に気づくことができると考えます。特に感染症が蔓延すると言われる冬場の体調変化やその対応についての相談、不穏時の訪問、緊急時の通院同行、緊急入院対応などの支援を実施しました。アウトリーチの支援に重点が置かれていくにつれて、本人や環境の変化への気づきと緊急対応についてのリスク管理が重要になってきます。緊急時において、各職員が落ち着いて対応できるように、職員会議では事例検討を行い、緊急時の対応について改めて職員全員でマニュアルを確認することや意見交換を実施しました。

引きこもり状態の方への支援は、緑区定例カンファレンスでも話題になることが多く、状況の共有や支援の検討を行っています。定期的な訪問にて本人の思いや状況を把握するだけでなく、家族との面談実施や8050問題への対応など、家族支援という視点を意識したケースもありました。ご家族がご本人の状況に困っているだけでなく、ご家族にも支援が必要なケースもあり、その際には各専門機関に繋げるなど、多職種連携にて支援を展開したケースもありました。訪問等を実施して見えてくることは多くあり、この多職種連携を活用した支援を今後も実施できればと考えています。

(3) 家族支援

ご家族は地方での生活を望み、障害のある子供たちには資源が充実している横浜市で生活を続けさせたいと考えていたご家族がいます。ご本人やご家族の想いを聞き取り、約 2 年間でそれぞれの生活を始める準備と支援体制の組み立てを進めてきました。これまでご家族が中心になって支えてきた生活を、支援者が引き継いでいくためには、ご本人だけでなくご家族との信頼関係も大事であると考えています。

緑区家族会は昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症対策を十分に配慮した上で、支援センターが会場調整とオブザーバー参加をし、隔月で実施される定例会と役員会の実施に協力してきました。例年同様、初めて家族会に参加されるご家族も多く、初参加後も継続して参加されていました。やはり家族としての思いを話すことや、他の家族の話を書く場はニーズがあると考えます。数十年ひきこもり状態を続け、医療など支援者の介入を拒否している子を抱えるご家族も継続的に参加しており、家族同士が支え合う場は重要であると思います。また、家族会の中で家族自身の心労への配慮より、その後職員と個別に面談を実施することがありました。家族としての苦労や負担は大きく、今後も本人を支えるご家族への支援が必要な場面では、積極的に支援につなげたいと考えます。

* みどり会定例会・役員会 → 隔月で実施

* みどり会新年会 → 新型コロナウイルスの影響で中止

* 家族教室 → 新型コロナウイルスの影響で中止。6 年度は実施の方向で緑区高齢・障害支援課と検討中

(4) 当事者活動支援

支援センターのプログラム実施においては、「利用者との協働」を念頭に、利用者の意見を取り入れることを意識しています。新型コロナウイルス感染症対策を行った上で、当事者活動をバックアップしました。

「手芸サークル」では、今年度当初の話合いで「クリスマスツリーの共同制作」を目標としました。6 ヶ月と無理のないスケジュールで製作に取り組み、12 月のクリスマスの時期に見事完成しました。そして支援センターフロアに飾り、クリスマス会などにて多くの方々に披露目する事ができました。

また「勉強会」として、ひきこもりをテーマにしたオンライン講演会の動画上映を行いました。上映後の意見交換では、ひきこもっている当事者に思いを寄せるコメントを多く頂き、当事者の視点に立ち「ひきこもる自分を否定しない」ことを考え、それらを共有する良い時間を持つ事ができました。

* 「手芸サークル」年 12 回開催 77 名参加

* 「支援センター連絡会 ピアを考える会」ピアスタッフの現状と今後の展望について 参加

* 「ひきこもる自分を否定しない」健康福祉局ひきこもり支援課主催 オンライン上映会 7 名参加

(5) 地域交流・地域連携

【緑区自立支援協議会での取り組み】

○事務局運営

緑区自立支援協議会においては、事務局として企画運営に携わっています。今年度も、参加者のアンケートの意見を各部会に反映することを心掛け、また各部会においてはコアメンバーが揃い始めるなど、「顔の見える関係から、一緒に考える関係づくり」を方針として参加者・部会・事務局のつながりを意識しました。年度末の全体会にて自立支援協議会全体を振り返り、参加者の意見を踏まえて課題を整理し、次年度の運営に向けてより良い協議会体制づくりに繋げることができました。

また、区内事業所の参画意識を高めることを目的として、各部会の 1 回目、自立支援協議会の機能や役割についての説明を実施しました。

○精神部会

今年度も「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築と連動させながら、精神部会を実施することができました。今年度の特徴としては、これまで検討してきた、当事者や家族、訪問看護事業所の新たな参加があり、より多職種間で話し合える場を作ることができました。

○住まいと生活部会

4年度から始まった緑区という地域について考える部会ですが、5年度は「環境面に焦点を当て、利用者を通して緑区について考えること」をテーマにしました。部会では障がい者後見的支援室や福祉機器支援センターに協力していただき、緑区という環境や本人が抱える生活のしづらさについて話し合いました。年度最後の部会では、当事者参加という共通の目的がある精神部会と共同開催にて実施し、動画視聴という形で当事者の生の声を聞く機会を設けました。6年度は分科会となり、より柔軟な形で緑区について検討する場にしたいと考えています。

○緑区自立支援協議会「相談支援専門員のための部会」

参加対象者を相談支援専門員に絞り、計画相談支援事業を進めていく上での実務上の困りごとを話し合うと共に、法定研修受講者のインターバル期間の受け皿としての活用も視野に、企画・運営を行いました。令和4年度に問題として見えてきた「移動支援」について年間を通じて継続的に話し合いを進め、「移動支援の情報の発信と受信のシステムの問題」に焦点化した話し合いを続けています。また、支援者支援の仕組み作りの一つとして、相談支援専門員が人材育成において区域で中核的な役割を担っていくために、グループスーパービジョンの体験とスーパーバイザーに必要な視点を学ぶ研修も企画しました。

【地域ケアプラザとの連携】

「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」を進めていく中で、地域ケアプラザが進める「地域包括ケアシステム」と繋がりを持つことができ、高齢や介護分野との関わりが増えてきました。

- 「地域ケアプラザ定例会議への参加」山下地域ケアプラザ 定例カンファレンスに参加(3ヶ月に1回)
山下地区のケースの共有を行い、実際に一緒に訪問することや支援センターの見学に繋がるケースもありました。
- 「民生委員児童委員・ケアマネージャー勉強会(鴨居地域ケアプラザ)」にて講義を実施
精神障害をもつ方への支援に関し、センター紹介/関わり方/事例紹介などの講義と意見交換を実施しました。また、この講義後にケアマネージャーから相談があり、繋がったケースもありました。

【その他】

地域交流を目的とした合築施設のおおぞらとの協働イベント「コスモスフェスタ」を4年ぶりに実施することができました。新型コロナウイルス感染症対策を念頭に、開催方法やイベントの規模、そして地域の方に楽しんでもらえる企画など、実施可能な形をおおぞらと一緒に検討しました。結果、屋外をメインとし、大人から子供まで楽しんでもらえる新たなコスモスフェスタを実施することができました。

***みどりコスモスフェスタ**

開催日：令和5年9月23日(土)

会場：おおぞら駐車場

来場者数：約200名

(6) 自主事業

※詳細については【資料4】参照

仲間と一緒に楽しめる機会や場作りは、支援センターの大切な役割の一つであると考え、行事、プログラムの実施を徐々に再開してきました。季節を感じる行事としての「里山ガーデンお散歩会」では、大花壇の花々に囲まれ、自然の散策を楽しむ事ができました。「お月見会」「プラネタリウム上映会」は、改めて夜の天空を感じる事ができたプログラムとなりました。また、コスモスフェスタ、クリスマス会、バスハイクなどの比較的人数が集まる行事については、人数や募集方法、内容などについて、感染症対策を考えたからこそその新しい工夫も生まれ、参加された皆様と楽しい時間を作ることに繋がりました。

(7) 情報提供

法制度の情報や様々な社会資源の情報（グループホーム募集情報、就労関係、企画イベント）、新型コロナウイルス感染症とワクチン接種について、適宜様々な方法（センター便り、ホームページ、館内掲示、ブックラック等）を用いて利用者やご家族、関係機関等に提供しました。より見やすい館内整備の工夫を心がけることや、情報提供の重要なツールであるホームページでは、その中のブログ機能を活用しタイムリーな情報発信をすることができています。また、ホームページではウェブアクセシビリティに関する仕様書に基づき配慮を行っています。

(8) その他

利用者アンケート、メンバーとの意見交換、意見箱及び利用者から寄せられた直接的な意見や質問等について職員ミーティング、職員全体会議において協議し、早急に対応すると共に、掲示や個別の対応、説明等により利用者に向けて回答し内容等を周知しました。

3. 退院サポート事業

※統計については【資料2】参照

今年度も新型コロナウイルス感染症対策を意識しながら、「12名（相談者含む）」の個別支援を実施してきました。そして新型コロナウイルス感染症対策の緩和も受け、病院内での面談や外出支援の実施の増加、さらには支援が再開したケースもありました。また、新規での相談も増え、徐々にではありますが退院支援が行える状況に戻ってきた印象を受けました。また、地域移行支援も併用し、ご本人の希望や状況に応じた支援も実施することができました。

ただ、院内で感染症が発生すれば支援はストップしてしまう事態になること、医療機関側の「入院期間3ヶ月」への対応など、様々な問題にも直面しました。今後もより医療機関や他区センターと協働を重ね、一人でも多くの退院支援を実施し、長期入院の解消や長期化させない対応など考えていきたいと思えます。

協働活動に関しては、昨年度と同様に、2か所の病院と一緒に啓発活動を実施し、病院職員（看護師や作業療法士など）に向けて、センター紹介や社会資源紹介を実施することができました。ただ、これまでコロナ禍であっても入院患者向けの啓発活動を行ってきた実績はありますが、まだまだ実施にはハードルが高くリスクもあり、医療機関との検討が今後も必要だと思えます。来年度はより多くの入院患者や病院と関わっていけるよう検討していきたいと思えます。

- * 退院サポート事業「連絡会」3回実施／「事例検討会」3回実施／「北部ブロック会議」4回実施
- * 生活訓練施設・退院サポート事業共催研修 1回実施
- * 新横浜こころのホスピタル 病院職員向け協働活動 2回実施
- * あさひの丘病院 病院職員向け協働活動 3回実施

今年度は計 21 名の個別支援を実施しました。新規登録者 5 名、終了者 3 名でした。自アシ導入が適切な
のか精査は必要ですが、その上でできる限り新規の依頼は受けるようにしました。

今年度の個別支援の特徴は、「医療面における福祉的な支援」をするケースが多かったことです。精神科
への通院同行をはじめとして、精神科以外の内科的疾患を抱える方も多く、受診の同席を複数のケースで
行いました。主治医からの説明の理解を助けることや、本人の状態を代弁する役割、本人の精神的な支え
という役割等も担いました。精神科や他科への入院が必要な場面では、関係機関との連絡調整等も必要で
あり、自立生活アシスタントとして調整を行いました。

登録者の中に末期がんの方がいらっしゃり、計画相談担当と連携して通院同行、入院時の調整などを
行い、最終的には病院で看取る形となりました。亡くなった後は遠方から出てこられたご家族と直接のやり
取りも行い、最後まで寄り添うことができました。

また、精神障害を持つ方の中には状態が悪くなると訪問することや、連絡を取ることに難しくなるこ
とがあります。今年度は継続的に訪問ができなくなり、連絡もとれない期間ができてしまった登録者がい
ましたが、本人または関係機関との関わりは切らすことなく、本人の状態が整うまで待ち、その後には関
わりが再開するケースが複数ありました。本人の状態に合わせて関わり、支援することができるのは、自
立生活援助事業とは違う自立生活アシスタント事業の強みだと考えます。

そして今年度は自立生活アシスタント事業の幹事的な役割を担う「自アシ委員」を務め、新人研修のイン
ストラクターや、事業の事例集を作成するプロジェクトにも参画をしました。また、市外の法人に対し
て自立生活アシスタントや自立生活援助の実際の支援について説明をする研修の講師として出向き、事業
の周知にも努めました。今後も関係機関と協力して自立生活アシスタント事業の強みや良さを外に発信し
ていきたいと思えます。

*****【普及・啓発活動】*****

精神の障害に対する偏見や差別はまだ根強く、その為に地域での生活に支障があると感じている当
事者・家族は多いのが現状です。当センターの責務として、地域に対する「普及・啓発活動」は必須であ
り、継続して実施していく必要があると考えていますが、今年度も感染症対策のため可能な範囲での実施
となりました。

《講習会・研修会・相談会の開催》

○かながわ共同会職域別研修

内容：自立生活アシスタント、自立生活援助の支援の流れについて事例を通して説明

○緑区自立支援協議会「精神部会」「住まいと生活部会」

内容：当事者 2 名の生活状況を動画で見てもらい、グループワークで意見交換

《市民向けのイベントへの参加》

○「緑区役所障害者週間イベント」

*スタンプラリー：11/1～12/8／スタンプ設置：緑区内福祉事業所や地域ケアプラザ等

*みどりハートフルマーケット：12/6～8／会場：緑区役所ピロティ

*福祉事業所紹介や作品展示：①緑区役所展示スペース、②各地域ケアプラザ

【そ の 他】

1. 「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム（以下にも包括）」の構築について

緑区自立支援協議会「精神部会」を活用し、日々支援していることが「にも包括」の構築であり、地域を作っていくことだと確認しながら、誰もが安心して生活ができ、支援を行き届かせていけるシステム構築を目指した協議を実施することができました。

今年度は、当事者参加や多職種連携を目標とし、参加の促しや意見交換が活発になる企画を検討するなどし、訪問看護や家族の参加に繋げることができました。直接の当事者参加は叶いませんでしたが、動画を使ったインタビューにて当事者の思いや生活を共有することができました。今後も当事者参加を促し、活躍できる場を作っていくことや、多職種連携について検討できる場を充実させることなど、協議の場を活用して地域づくりを進めていきたいと考えます。

《企画した活動テーマ》

- ・第1回「医療と地域の繋がりを深めよう！医療機関、福祉事業所との交流会！」
- ・第2回「当事者の話を聞こう！」※当事者の思いや生活の様子の動画視聴など
- ・第3回「訪問看護師と話をしよう～医療との連携を深めよう～」

2. 職員資質の向上・人材育成

より質の高い支援の提供を目的に、外部研修への参加奨励、法人主催の虐待防止研修、支援センター内部での職員研修会等を実施し、人材育成の一環として職員の資質と知識の向上や対人援助職としてのメンタルケアやモチベーションの維持に努めました。研修会での講師やインストラクター等について外部から依頼を頂いた際には、双方の人材育成の視点から、積極的に参画しました。同法人である中区生活支援センターからの依頼を受け、年4回スーパーバイザーとして事例検討会にも参加しました。

また、緑区生活支援センターの特記すべき点として「新人職員の育成」が挙げられます。入職した新人職員にはそれぞれに「担当職員＝スーパーバイザー」をつけており、定期的な振り返りを実施しながら「職場内スーパービジョン体制」を取っていく形が、しっかりと体系化し定着しています。先輩職員に相談するという土台作りができていることで、経験を積み重ねても壁にぶつかった時には「相談できる」という意識が、職場内において積み上げられていると考えます。さらにその実施内容について「管理者視点、支援者支援の視点、そしてバイザーも育成していく視点」などを交えて、「所長主任会議にて共有」できていることも資質の向上に繋がっていると考えます。

職員会議においては、事例の共有とその検討から、各職員への気づきへと繋げる形を、職員同士が自然な形で理解できており、会議においてもグループスーパービジョンを実践することができています。事例提供や論点に沿った発言、そして進行やまとめ方などそれぞれの役割をこなすことも職員のスキルアップに繋がっていると考えます。

《今年度支援センターで実施の職員研修、勉強会等》

【伝達研修】

- * 「相談支援従事者指導者養成研修」
- * 「ピア座談会」

【内部研修】

- * 「支援者として考えてきた力」
- * 「個人情報保護研修」
- * 「人権研修」 ※権利擁護と虐待防止を含む
- * 支援困難事例について、職員会議、職員ミーティング等における「事例検討」6回実施

3. 実習生の受入れ

今年度も新型コロナウイルス感染症対策を考慮した上で、実習生の受け入れを行いました。理解を示していただいた利用者宅への訪問や社会資源への見学など、利用者交流をメインとしながらも地域を広く知ってもらう機会を設けました。また、日々の振り返り時間を確保することや、担当以外の職員でも振り返りを実施するなど、良い学びの時間になるよう実習プログラムを組み、対応することができました。

また、公認心理師を目指す東洋英和女学院大学の学生に対し、大学構内にて精神障害への理解を促す実習を行いました。利用者の実際の生活場面や心境などを動画で視聴する等、工夫をして実施しました。

- * 日本福祉教育専門学校…実習生 1 名、計 16 日間
- * 田園調布学園大学…実習生 1 名、計 14 日間
- * 東洋英和女学院大学 人間科学部 人間科学科…大学構内にて講義実施、参加者 7 名、1 回

4. 安全管理・災害対策

安全管理に関しては、利用者個々の日々の様子を意識し、不穏時、緊急時の対策等について日頃の職員ミーティングや職員全体会議において検討、対応策を講じました。

災害対策は、緑区役所との「福祉避難所に協力する協定」に基づき、万一の災害時対策として、災害備品（発電機、サーチライト等の照明機器、ラジオ、懐中電灯等）と災害用備蓄品を整備し、使用方法等職員全体で確認する等、福祉避難所協定締結施設としての整備を継続して行っています。

合築の地域活動ホームとは年 2 回の「合同避難訓練」の実施を行い（今年度は新型コロナ対策のため 1 回の実施）、災害時や不穏者への対応方法の共有や、双方の事業所の早朝・夜間勤務体制、緊急時連絡体制の確認等を行いました。

また緑区社協福祉施設等分科会では、大規模災害時を想定した訓練の一環として「緑区内災害緊急時連絡用回覧板」の取り組みを継続的に実施しており、地域の横の繋がりと近隣施設との顔の見える関係作りに繋がっています。また中山町地域防災訓練では、地域での有事における連携体制の確認をするなど、大規模災害時に備えて具体的な備えをすると共に、地域や近隣福祉施設との連携の強化に繋がっています。

令和 6 年 1 月 1 日に起きた能登半島沖地震を受けて、アウトリーチ支援が難しくなってしまう状況も想定し、とりわけ単身生活者への災害に対する備えや避難先などの確認を始めています。

6. 衛生管理

年 2 回清掃業者による館内全体の清掃、及び毎月 4 回緑区内地域活動支援センターによる清掃（委託）、毎月 1 回調理器具の消毒、漂白やシーツ類の洗濯を行い衛生管理に努めました。特に調理室の衛生や調理に使用する布巾、タオル等については食中毒防止の観点からも清潔を保つよう徹底しました。

またノロウイルス、新型コロナウイルスへの対策として、マスク着用のお願いや手洗いの推進、入口自動ドア前、トイレ出入口付近、調理室前等に手指の消毒液を設置、開館、閉館時、夕食サービス終了後に調理室・食堂のテーブル、手すりや椅子等の消毒の実施など、念入りに実施しました。

7. 新型コロナウイルス感染症対策の実施

今年度も引き続き、新型コロナ感染症予防のため、できる限りの工夫と対策を実施しながら、支援センターの運営を行いました。

【利用者】

- ・ 来館時の検温、手指消毒、マスク着用などの徹底（新型コロナ5類移行後は協力依頼での実施）
- ・ 夕食サービスの利用における人数制限の設定（新型コロナ感染症5類移行以後は緩和）
- ・ 入浴、洗濯の事前予約制度の設定
- ・ 飲食や密の心配のあるプログラムは慎重に検討をし、感染症対策に留意して実施
- ・ 利用者の健康状況や様子の見回り

【館内】

- ・ 開館・閉館時、食事前後、また適宜に館内の消毒実施
- ・ 空気清浄機等の設置（フリースペース2台、職員室1台、相談室各1台、休憩室1台）
- ・ フリースペース、相談室、静養室など換気や消毒（手指消毒用アルコールの設置）
- ・ 飛沫防止のための設置物（ビニールカーテンやアクリル板の設置）
- ・ 情報発信、予防啓発のチラシ等掲示

【職員】

- ・ 出勤前と勤務前の検温、手指消毒、マスク着用の徹底
- ・ 情報共有（県や市からの情報など）
- ・ 使用した部屋や共有物の消毒
- ・ 職員本人や家族の体調不良についての報告

緑区生活支援センター 年間運営状況

※（）内…昨年度実績

5年度 開所日数		308日	
登録者数	5年度登録	39(39)名	
	全登録者数	1429(1390)名	
利用者数	本人	2500(2891)名	8.1(9.4)名/日
	家族	341(231)名	1.1(0.8)名/日
	ボランティア・関係機関	182(132)名	0.6(0.4)名/日
相談支援	電話相談	5281(5945)件	17.1(19.3)件/日
	面接相談	841(677)件	2.7(2.2)件/日
	訪問・同行	475(424)件	1.5(1.4)件/日
	非構造面接	427(283)件	1.4(0.9)件/日
	嘱託医相談 35回実施	10(10)件	0.2(0.3)件/回
	心理士相談 42回実施	53(23)件	1.4(0.5)件/回
各種サービス	夕食サービス・週3回提供	1508(1389)名	10.0(10.0)名/日
	入浴サービス	136(172)名	11.3(14.3)名/月
	洗濯サービス	30(43)名	2.5(3.5)名/月
	インターネットサービス	51(33)名	0.2(0.1)名/日

退院サポート事業 年間実績

【資料2】

5年度 個別支援者数 (退サポ：9名 地域移行支援：3名)						
退院サポート事業	支援継続	6名	退院者	0名	アパート設定	0名
	退院後フォロー	0名			自宅	0名
	相談中	3名			GH	0名
	支援終了	3名			生活訓練施設	0名
(終了者3名内訳：転院、地域移行へ、退院後フォロー終了)						
地域移行支援	3名					
5年度 啓発活動 (計5回)						
病院	・患者対象：0回		・院内職員対象：5回			
関係機関・地域	・関係機関：0回					

自立生活アシスタント事業 年間実績

※（）内…昨年度実績

【資料3】

5年度支援者数		登録者	21(17)名	相談中	1(0)名	
支援内容	面接	23(48)回	心理情緒	398(395)回	衣食住	249(241)回
	訪問	191(132)回	医療健康	331(281)回	対人	125(155)回
	同行	48(33)回	消費生活	207(172)回	就労	90(72)回
	ケア会議	5(7)回	関係機関との連携	51(10)回	余暇	13(5)回

【プログラム】

回数	プログラム名	内容	場所	参加人数
12回	手芸サークル	クリスマスツリー飾り制作	支援センター	77
6回	みどり菜園	野菜の作付け、収穫	緑市民菜園	25
12回	余暇支援	動画を使ったバーチャル旅行とクイズ	支援センター	52
10回	センターソフトボール	ソフトボール練習、練習試合	白山ハイテクパーク	98
1回	勉強会	ひきこもり支援について動画上映	支援センター	7
1回	スポコンクラブ	ウォーキング	恩田川添い	4
4回	メンバーミーティング	センター利用について	支援センター	18
45回	嘱託医相談	精神科医師による相談会	相談室	10
38回	心理士相談	心理士による相談会	相談室	53

【季節の行事】

月	プログラム名	内容	場所	参加人数
4月	里山ガーデンお散歩会	みのりの会と合同	里山ガーデン	17
5月 11月	ズーラシアお散歩会	ズーラシア動物園散策	横浜ズーラシア	22
7月	プラネタリウム上映会	プラネタリウムと銀河鉄道の夜	支援センター	6
8月	納涼会	焼き鳥、ビーチボールスイカ割り等	支援センター	32
9月	お月見会	動画上映、お団子	支援センター	8
12月	ミニクリスマス会	コンサート、ビンゴ大会	支援センター	57
1月	初詣	近隣の神社へ初詣	中山杉山神社	8
2月	豆まき	地域の豆まきイベントに参加	みどり福祉ホーム	6
3月	バスハイク	小田原城、かまぼこ工場	小田原市	29

【地域交流】

回数	プログラム名	内容	場所	参加人数
1回	コスモスフェスタ	あおぞら合同 秋祭り	合築施設駐車場	200

【地域支援事業・地域普及啓発事業・その他】

回数	プログラム名	内容	場所	参加人数
4回	出張個別相談会	地域の方に向けた相談会	東本郷ケアプラザ	4
12回	家族会定例会・役員会	オブザーバー参加	地域交流室	154